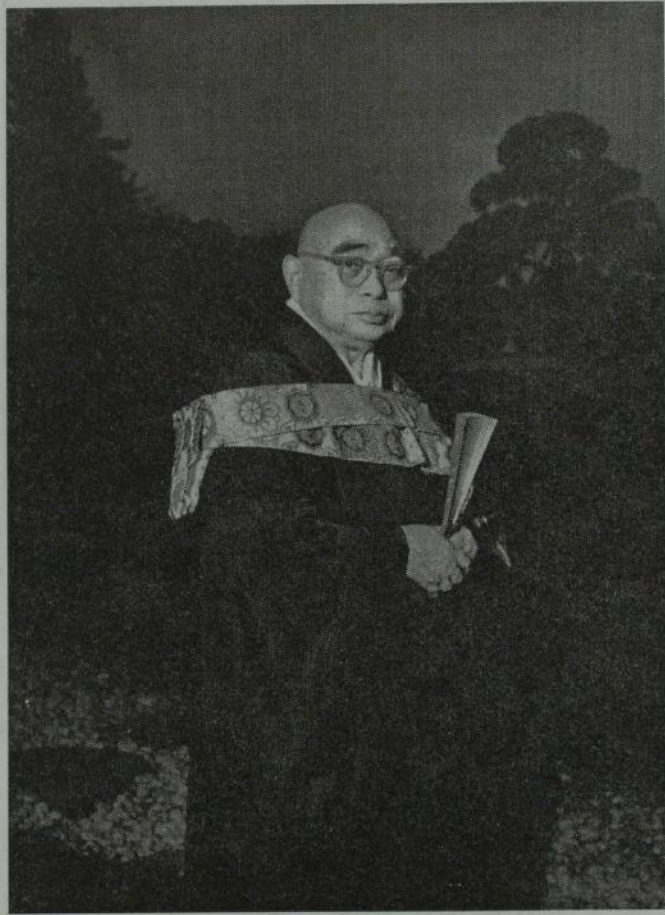


NO. 158

全 仏

7/45.



心に形相なし、たとい見聞あり、覚知ありとも、ついに去来にあらず、動静にあらず、かくのごとく見得する。

すなわちこれ心を知得する底の漢、なをこれ聞解といいつべし

(総持寺開山 瑩山禪師)

(曹洞宗管長 岩本勝俊禪師)

文化外交の展開

松本 徳明

(全仏常務理事・文庫)

日本をめぐる国際環境や、その雰囲気は、決して楽しいものではない。終戦後の日本の復興と繁栄はまことに目覚ましく、その経済力は世界にほこるべきものがあり、諸外国からは奇蹟の如く驚嘆されている。しかしその反面、出る釘は打たれたとえの如く、日本に対する警戒心というか、猜疑、羨望というか、日本にとってはまことに迷惑な考えも加わって、反日とまではいえないが、一種異様な排日毎日の空気が東南アジアは勿論、世界に広がりがつつある。このことは大いに反省し、深く注意しなければならぬ。対米関係も例外ではない。これが対策をおそさないように構すべきであらう。

日本人はエコノミックアニマルだという声は近來一般的になったが、東南アジア諸地域においては、それが声ばかりでなく、日常の感覚にまで浸透せんとしている。戦時中に日本人が植えた悪感情は勿論ある。しかし、それは占領地域によっていろいろ異り、日本に対する親近感を持っているものも相当にあった。大東亜戦争をチャンスとして彼等が植民地から脱却して、自由独立の民族になってからは、日本に対する怨恨をまじえた憎悪心とは別に、日本に対する尊敬感謝の念すらあり、また彼等の復興発展のため日本の協力援助を望む声も次第に強まっている。こういった情勢にあつても、なおエコノミックアニマルといわれるのは、矛盾きわまるようにきこえるか

も知れないが、それにはそれ相場の理由がある。東南アジアにとびこんで勤勉に働く日本の経済人が、経済感覚にはぬけぬけはないが、文化感覚を身につけているものが少ない。現地の風習、宗教、芸術等に対する理解がとぼしい。また日本人自らが現地の人々に、日本文化を紹介する能力を持たないのが多い。だから、文化交流という教養がなければできない仕事に対しては無関心で、ただ経済的交渉のみに終始している。これではエコノミックアニマルといわれても止むを得ぬであらう。その上に東南アジアにおけるインテリあるいは指導的立場にある人は一般に英字新聞雑誌を読んでいる。

それがこぞってエコノミックアニマルと叫びつつけているのだから、彼等が自然にその影響を受けるのもまた当然である。

世界経済の競争場裡においては、まことにいろいろいことだが、有色人日本に対する人種的偏見がその底に流れていることを注意する必要がある。

こういった態勢に対してわれわれのとるべき対策はいろいろあるが、最も必要なのは文化交流であり文化外交である。

東南アジアにおいて、仏教者は、その立場と信念に立って文化国民外交を積極的に推進すべきだと思ふ。

この考えからみて、いまわれわれ仏教者が大いにのり出すべき好適のチャンスが来たと思ふ。

ポロブドゥール仏教遺跡

それはポロブドゥール復興協力事業である。こういうつても、大かたの人々にはびんとこないだろうと思われるので、すこし説明を加えておく。この事業はいま国連のユネスコが中心になって世界的に働きかけたばかりであるが、すでにアメリカ、ヨーロッパにおいては一大センセーションをまきおこし、人類文化遺産の保存という意味で高く評価されているのであって、日本もだまっておれない立場に立たされている。

ことにポロブドゥール遺蹟は仏教遺蹟であり、ことに大乘仏教遺蹟である。しかも芸術的価値からいっても、建築構造の規模の上からいっても、比類まれな格調の高い傑作である。

ポロブドゥールに就いては、かつて研究論文や写真で承知はしていたが、独逸滞在中、オランダのライデン博物館でその断片を眺めるにおよんで、その優秀さに一驚した。その後大東亜戦争中、ジャワに出かけてポロブドゥールに親しく参拝する機会に恵まれ、その壯麗雄大さにうたれたので、戦時多忙の日程ではあったが、四日間そこに滞在して、つぶさに調査することができた。そしてこの地域を管轄しているジャワの軍政総官にこれを述べ、かつ軽率な修理はかえってポロブドゥールの価値を破壊する所以をとき、その保存には嚴重な注意を注ぐよう強く希望した。

実はその当時すでに相当破損していた。現在では、破損度もひどく、このまま放置しておいたのでは、この高貴な文化財を取りかえしのつかない崩壊にみちびくことになり、人類の大損失になると深く憂うのである。こういう状況にあるために、ユネスコが復興運動に手をそめるに至ったのである。

ポロブドゥールの意義

そもそも、このポロブドゥールは中部ジャワのジョ

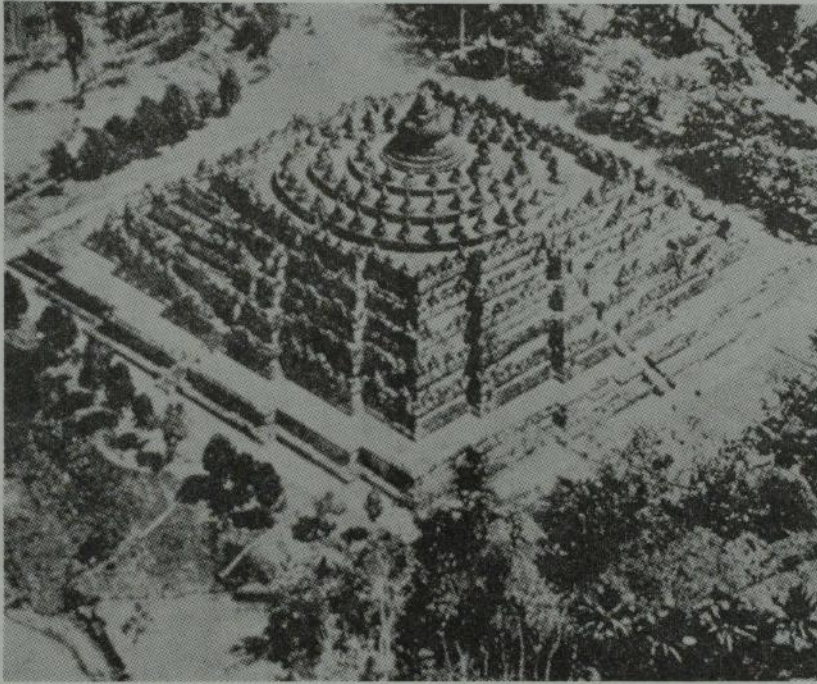
クジャカルタの西北にあり、七五〇年前後およそ百年位の日時をついやして構築されたものと思われる。大きな土饅頭のまわりに、安山岩に彫刻したものを立てならべ、下坦に方形六坦と、その上に円形三坦をかさね、その上の中心に鐘形の塔を載せた雄大な立像曼陀羅である。下から上に向かって昇段、再び下に向かって下降するようになってい

る。そこに配置された仏像彫刻は、グプタ芸術の最高度のもので、彫刻にあらわれた内容にはマハーカルマヴィハンガ(分別善惡報応経)、ジャータカマラ(本生話)アバターナ(譬論話)ラリタピスタラ(方広大莊嚴経)ガンタビユーハ(華嚴経入法界品)にとかれてい

る。それを上求菩提下化衆生の構想のもとに見事に配置されている。ポロブドゥールのような雄大な仏教建造物、ことに立像曼陀羅は、世界の仏教遺蹟のなかでその比類をみない立派なものである。印度などにおける仏教遺蹟は、殆んど破壊しつくされているが、このポロブドゥールは不思議にその形を遺している。それは、ポロブドゥール周辺は火山が多く噴火の火山灰によって早くからすっかり埋没したという。あるいは仏教者が破壊をおそれ自ら埋めたともいわれる。また創立当時から方形下坦は埋れたままにあり、上の円坦は完成しない間に天変地変に遭ったと見る人もある。いづれにしても、今日までよく遺ったものだと思

ポロブドゥール発掘

一八一四年にイギリスのラッフルス卿が埋没したポ



ロブドゥールを発掘して、その姿を再び人類に示したのである。ラッフルスはスエズ運河の開発を初めとしいろいろ大きな仕事を残した偉人であるが、ポロブドゥールを発掘したその功績は、われわれの感謝にたえぬところである。その後度々調査しその結果が発表さ

れている。度々修復も行なわれた。一九〇七年からの修理の際即ち一九一一年、クローム等が詳細に撮影した写真は、地下の最下基壇をもふくめており、その解説と共に、ポロブドゥール研究に非常な貢献をあたえ

た。また美術学校出身の青年画家三浦秀之助氏が、美術学校長正木直彦氏を初めとする後援者の力を借りて大正十三年から十四年にかけて、五三五枚におよぶ実に立派な写真の写真を発表し、これに入念な解説を加えて出版したことは、まことに偉大な功績といわざるを得ない。また、フランスの学匠シルヴァン・レビー氏もポロブドゥールについての貴重な研究を発表した。その他いろいろの学者がこれに手をつけたが、日本においては、九州大学名誉教授千瀧章祥氏がその真言密教の立場から深く研究している。またポロブドゥールの建築学的研究は工学博士千原大五郎氏が学位論文となるだけの研究を発表した。その他最近においては並川亮日本大学教授等が相ついで現地をおとずれ、ようやく日本にもポロブドゥールの名が広まってきた。近來、カンボジアのアンコールワット、インドあるいはセイロンの仏蹟は日本でも相当宣伝されたが、その何れにもまさるとも劣らない、また世界に唯一つ残っているとされるこのポロブドゥール立像曼陀羅が、日本の仏教者、仏教学者からあまりにかえりみられなかったが、これは、全く奇異の感にうたれたところである。人類の一大文化遺産であるこのポロブドゥールが世界の識者によって復興されんとしていることはまことによろこばしき限りである。日本の仏教者たるもの大いに立ち上って、あらゆる角度からその復興協力につとめることは、仏教者の当然たるべき任務であると思う。このことがまた、エコノミックアニマルと嫌われる日本が、偉大なる文化外交を展開することになると思う。

インドシナ動乱と日本仏教者

私はかつて東西本願寺および知恩院の法主、門主の方々、並びにその宗務総長の協賛の下に、ヴェトナムラオス、カンボジア、タイの仏教者に向つて、その政治的いきさつを越えて、仏教信念にもとづき、平和の

確立に向って協力結合されんことをうったえたが、それはポロブドゥール創建前後におけるインドシナ半島ジャワ、スマトラ、ボルネオ、セレベス、バリ島を含めて当時の東南アジアと日本との仏教関係を想い起し、そして、この地方がながい植民地時代を脱却し、自由独立を獲得した現代、アジア共同体の考え方に立ち、相たすさて復興繁栄に協力し、真の平和を打ち立てて貰いたい気持ちからである。

南海仏教との交流

とかく日本の仏教者は印度より中央アジアを経由した仏教東漸の歴史には親しみが深い、南海経由の歴史にはうといものである。しかし二、三世紀に出た大乘仏教の大先達竜樹の弟子アリーヤデーバはセイロン生まれである。従って当時早くも、竜樹に関係深い大乘仏教がセイロンに入ったのは当然である。くだって法顕がセイロンについたのは四一〇年であり、つづいて四一三年にはジャワにより中国に帰還し、四一四年法顕伝をあらわした。今のパークテキストは、法顕におかれてセイロンに来たブッダゴシヤ（仏音）が四三二年頃に大成したものであり、その著サマンタパサーデーカ善見律毘婆沙は、仏音みずからナーガセーナ（那伽仙那）に与え、ナーガセーナが、此の人はインドのパラモンである、カンボジアのジャヤバルマンに中国に派遣され、その弟子サンガパッドラ（僧伽跋陀羅、衆賢）が四八八年これを漢記し、それ以来衆聖点記が大いに用いられるようになった。これよりすこし前に、大乘がジャータカや上座部律をカンボジアから中国に伝えている。義浄三蔵はスマトラのバレンパンに六八九年から六九五五年まで六年間も滞在し、南海寄帰内法伝をあらわした。大乘密教の興隆者ヴァジュラボーデー（金剛智三蔵）とアモーガヴァジュラ（不空三蔵）は七三八年にジャワにおいて師弟の関係をむ

すび、いずれもセイロンで密教を学び、東南アジアを巡遊して中国に入った。共に弘法大師入唐より少し前のできごとである。ポロブドゥール建立と時代を同じくして七五二年東大寺大仏開眼供養が行なわれたが、その時の大導師ボーデーセーナ（菩提仙那・バラモン僧正）、大衆師仏哲は共に南海より日本に来た人々である。特にこの仏哲はメコンデルタ地方の出身で、自ら太平楽を作曲すると共に、その地方の音楽を日本に伝えた。それが林邑楽である。七五九年に唐招提寺を建立した鑑真和尚と共に日本で相前後して入寂した。その他史実をあげれば限りが無いが、これ等は要するに、当時の東南アジアと日本との文化交流が如何に盛んであったかを物語っている。

結 語

その当時を回想し、ひるがえって現在の東南アジアを見て感慨深きものがある。インドシナ半島は戦雲にとぎされ、アンコールワットは戦火をこうむらんとし、ポロブドゥールはまた崩壊に瀕している。こういった現状をながめて、われわれ日本の仏教者は手をこまねいてこれを黙視する訳には行かない。インドシナ半島に平和をもたらし、アンコールワット、ポロブドゥールの文化遺蹟を大切に保存するために、大いに手をさしのべるべきである。これは現代に生をうけているわれわれの重大な責務であると思う。日本人の立上りを念願してやまない。

全日本仏教文化会議

第三回シンポジウム開催

全日本仏教会と国際仏教交流センターの共催によって開催されてきた日本仏教文化会議の「アジア開発と仏教」のテーマによるシンポジウムは結実の年である第三回を迎え、来る八月三十、三十一日の二日間、神奈川県箱根仙石原のホテル花月園内会議場で開催されることになった。

本年度の開催決定にさきだち、六月十六日に全仏事務総局において文化専門委員会（真深義賢委員長）を議長文化局長より本年度シンポジウムの内容が発表され、各委員よりの意見が答申された。

ついで六月二十日、京都において羽澤一論仏教文化会議副議長、雲井昭善大谷大教授、藤吉慈海花園大教授ら関西側学人と白藤憲佑全仏文化局長、真深義賢全仏文化専門委員長らにより、関西側学人の協力とシンポジウムのもちあがが話合われた。そこで従来よりおこなわれてきた各分科会を本年は開かず基調講演を中心に全参加者による討論形式をとることになった。この討論内容をさらに実践的方法論にまで志向す

ることを関係者は期待している。正式参加者は仏教、政経、社会関係の学者約七十名が予定されているが、一般の聴講も歓迎することになっている。

日本仏教文化会議第三回シンポジウム

テーマ「アジア開発と仏教」

一、開催日時 八月三十日午前九時〜三十一日

一、会議場 箱根仙石原「ホテル花月園会議室」

第一日 △基調講演

「アジアの政治経済の近代化と宗教」

一橋大教授 板垣与一先生

第二日 △基調講演

「アジア開発の精神（仏教）構造論的アプローチ」

東大教授 中村元先生

主催 全日本仏教会

同仏教文化会議

国際仏教交流センター

転法輪

人身受け難し

生命の人工合成によせて

今度、ノーベル賞受賞者であるウィスコンシン大学教授H・ゴビンド・コラーナ博士によって人工的に遺伝子が合成されたと報じている。コラーナ博士は印度人であるが、今は米国の市民権を持っている人である。

遺伝子の本態は最近誰でもよく口にする所謂核酸であって、生命にとって本質的なものであり、核酸のないところに生命はない。しかもこの核酸（正確にはデオキシリボ核酸、略してDNA）は生物自身が本来的に持っているのだから他から採り入れる必要はない。そこで生命現象を究明するには、このDNAそのものを研究することが絶対に必要であり、最近この方面の学問が華々しく登場してきた。天上天下唯我独尊というけれど、実は全くその通りで、「あなたという人間」はこの世に一人しかいないし、その「あなた」は卵細胞が受精したとき、両親から半分ずつもらって来たDNAによって決まってしまったのである。あなたの心臓も、肺も、血液も、すべてどのように作られたかは、DNAにきざまれていた遺伝暗号によつたものである。そしてこのDNAは規則正しい二重らせん構造になっていて、ラセン・ハンゴの横木の段々にあたるどころが、遺伝の暗

号で、この段々は、A・G・C・Tと称する四種類の塩基から成り、A-T・G-C・T-A・C-Gというペアを組んでいるといわれている。人間にはこの暗号が約五十億個もあるというのである。

コラーナ博士は、従来外部から挿入れることの出来ないといわれた遺伝子を化学的に簡単な有機化合物を材料にして合成したのである。この合成遺伝子はイースト菌中でアラニンというアミノ酸を運ぶリボ核酸をつくる遺伝子であるが、天然のものと同じだということである。DNAは、またクレオチドというものが多数直列で一細胞のなかにつながって構成しているのだが、今度の遺伝子は僅かに七十八個つないだものにすぎないので人間の遺伝子に比べたらもの数ではないが、このように生命の本質である遺伝子が人工的に合成されたことは驚異的な研究である。さあこうなると、あるいは遠い将来であっても、人間の設計によってある種の生物を思ひのままに創り出すことが出来ると考へる人が出て来るかも知れない。果してそうだろうか。われわれは人身受け難しと固く信じているのだが。

ダービンは生物の進化について偉大な発見を行なった。しかし生命そのものの起源については手をつけなかったのである。このような進化論ですらキリスト教からは多くの迫害をうけたけれど、仏教をはじめから「諸行無常」を法としていえるだけに何のこだわりもなくこの進化論を受け容れることが出来た。ただ生命の

人工合成となると仏教もどのように受け取っていいのか。今後の仏教伝道に一つの大きなテーマを投げかけるものである。科学は生命をつくる。つまり、アミノ酸の合成が出来るとなると、合成した多くのアミノ酸から高分子の蛋白質が造れるようになって生命現象の創造も可能であるとマサセッチェ・インステテュート・オブ・テクノロジーのヒーストン・スミス博士は強調している。またサイバネティクスの理論によれば、ものを考える能力を持った機械が作られるようになるので、科学は精神をも創造するこゝとが出来るとなるといふ。

もちろんこのような生命らしきものは、現在の生物とはおおよそ異つた単細胞生物で、醗酵のかたちで有機物を分解してエネルギーを作り、生きていたといわれているが、ここからダービンの進化論を当てはめれば、今日の生物を把握することが出来る。今日のように呼吸する生物など、はじめからいたわけではなく、原始の気には酸素はなかったと推定されるから、おそらく有機物を分解して生きていた生物から三ミクロン位の単細胞の緑ソウ（クロレラ）が生じ、はじめに酸素を作るホープとして出現したことにより植物が出来ると同時に、やがては呼吸生物が出現するようになったと思われる。すべての生命現象には、核酸（DNA）と蛋白質とATP（アデノシン三リン酸）の三分子がなければならぬといふのが科学的一様性であるから、すべての生物は祖先を二にすることだけは間違

いない。

仏教ではこのような歴史を所諸因縁といっているが、科学的に説明すれば生命は地球で発生したとしても約五十億年間の化学反応の集積である。その永い過去を無視しては現在の「私」はない。と同時に「私」という個は五十億年間に色々と他と関係することなしでは出現しなかつたのである。正に「人身受け難し」である。しかも、私たちの両親がなければ「私」はないのだが「私」を作るメカニズムも、設計も決して両親が考へ出したものではない。コンピュータは人間の頭脳を遙かに超えるものを持っているし科学はある意味の精神を創る時代が来るかも知れない。

しかし人間のセルフデターミネーション（自律性）を果して科学が否定し得るかどうか、人間の頭脳は現代の科学をもってしては解明出来ない恐るべきメカニズムの集積である。しかも、これは人間の設計によるものではないところにわれわれは、自然に存在する一つの偉大な「法」を信ぜざるを得ない。国の盛衰を超えて生き続ける山河の自然にも、また袖すれ合う僅かの縁にも、それぞれ何か「法」が流れているのではないか。生命の人工合成が試験管のなかで出来たらからといってわれわれは「受け難き人身」であるという深い縁を忘れてはならない。こたこのような科学的な研究や成果を理解しない仏教伝道ではもうこれからの社会には通じないことを充分反省すべきではないかと思う。

(蒼)

宗教法人の行なう公益事業その 他の事業に関する調査の概要 (終)

文化庁宗務課 河和田唯賢

(一) 事業についての意見

昭和四〇・四一年度の調査にみられた意見の傾向性は、布教教化のためにもなり、法人の維持経営にも資し、事業も概ね順調で、今後も行なうという意見を述べたものは七〇%近くに達し、その他肯定的見解を示したものは七五%を越え、(事業を行なっていない場合でも五三%が肯定的)二三%程度は否定的な見解を示している。(事業を行なっていない場合は三二%) また、事業に対する低利融資や助言指導を望む意見も、かなりみられた。

(3) 第二次調査

④ 回収率

第三年次までの対象法人数一三〇〇、事業数一八〇三件で、有効回答五九四法人(四五・七%)、無回答五三〇法人(四〇・八%)で残余は白紙回答である。系統別の送送法人数と有効回答数は表3のとおりである。【(一)内は有効回答数の送送法人数に対する百分率】

右のようにキリスト教系を除き、回答率は必ずしも良い方ではない。また、その理由も種々考えられるであろうが、ここではそれにはふれない。元来、性質、規模、形態が異なる各種の事業について、

一様な統計を出すことは困難であり、第二次調査の性格からして平盤的に数量統計によってのみ処理することは必ずしも妥当ではないであろう。事例研究という意味も含めて、同じような性質の事業を一括して、おおよその傾向をみることは可能であり、それなりに意義もあることと思われるので、たとえ回収率は低くとも、数量的に満足しないところもあったとしても、必ずしも悲観するにあたらなものである。なお、第二次調査で回答のあったものの中で、項目によっては記入しないものや明らかでないものが多くあり、種々な点で今後の解釈に俟たねはないところがきわめて大であろう。

◎ 主な事項

事業開始年度

昭和一九年以前とそれ以後五年毎に区分してみた。全体として昭和三〇年以降に開始されたものが多い。教育文化関係は昭和三五年以降が多いが、幼稚園、保育所は昭和三〇年以前が断然多い。厚生社会福祉関係は平均しているが、結婚式場は後半が多い傾向をみせている。商業一般は、貸家貸地等を除き、昭和三六年以降のものが多い。全般的傾向として、戦前を一つの区切りとして、昭和二〇

二五年は少なく、昭和二六〜三〇年に多くなり、昭和三一〜三五年は増加がゆるやかな傾向をみせ、昭和三六年以降増加している。都市近郊、住宅地では昭和三六年以降の比率は大である。

許認可の有無

行政庁の許可、認可等を要する事業、例えば、幼稚園、保育所についてみるに次の結果となる。

幼稚園(二二〇)	一一三	三	四
保育所(八一)	六五	四	二
認可有	認可無	不明	

事業の目的

布教強化、教育、技能の修得、教養、社会福祉等を目的として記載したものが断然多い。また、商業一般では法人の維持運営をあげているのが大部分である。

規定の有無

事業を行なうについて規則等に定めているかどうかということであるが、次表のとおりである。

【昭和四〇年度】

有 一〇九(三〇%)

無 二〇一(五六%)

不明 四七(一三・一%)

【昭和四一年度】

有 六七(二七・四%)

無 一四九(六一・八%)

不明 二五(一〇%)

【昭和四二年度】

有 五八(三三%)

無 一〇七(六二%)

不明 七(四%)

また、宗教系統別ではキリスト教系は

浄土宗全書

—日本仏教の成果 浄土教のあけぼの—

- 予約申込規定 全四十二巻予約申込者のみに限り出版します。
- 定価 各巻 2,000円/特価 全四十二巻一時払80,000円/申込期限/昭和45年7月末日 ※内容見本進呈※
- 刊行期日 昭和45年4月第一巻好評発売中・第二巻5月配本・第三巻6月配本・毎月一冊刊行
- 御申込みは大正大学浄土学研究室・仏教大学浄土学研究室・右記発売元又はお近くの書店か浄土宗宗務支所にお申込み下さい。

★おわび—解説・執筆者塚本善隆先生ご病気の為2回配本が遅延いたしましたことを、ご購読者各位に深くおわび申し上げます。

発行所 浄土宗開宗八百年
記念慶讃準備局
総発売元 山喜房仏書林

東京都文京区本郷5-28-4東大赤門
前 TEL03-811-5361 振替 東京1900

幼稚園とかその他、まとまった形態の事業を行なっている傾向にあるところから起因しているのではあるか。

役職員、施設等

代表的な事業についてみると、幼稚園保育所等は専用の土地、建物を持ち、専従の職員がおり、有給を建前とし、かなりの幼児を受け持っている。これに反し茶華書道塾、学習塾、結婚式場等は、共用の施設で、規模も大きくはなく、非専従、無給の形態のものが多く傾向をみせている。駐車場についても、非専従、無給で、月平均の収容台数も二〇以下のものが多い。

収入等

法人総収支と事業会計のそれとの比率を回答して貰う項目についてみるに、不明のものは、六三・八%(昭和四〇年度)七五%(昭和四一年度)六九%(昭和四二年度)であり、質問に対して答えにくかったかどうか、その他の事情等今後検討されるべき問題の一つとなるかも知れない。また繰出金についてみると、表4のとおりであり、全体としてみれば、あまり利潤をあげていないように見える。なお、ここでも不明のものが多し。

三、おわりに

以上、飛び石を伝うように、しかも駆け足で、事業調査の概要を述べたが、要領を得ないところが多かったことを申し訳けなく思う。現在、調査も継続して進められており断定しにくい点が多い。

全第3種郵便物認可
また、今まで纏めた集計表も大きな分量に上り、第一次六〇余表、第二次七〇

余表にわたり、三か年分あるので、その分析も並大抵のことではない。しかし、画期的な調査であり、宗教界のご協力により貴重な資料を得ることができたのであるから、何らかの形で纏め

て、皆さまのよき参考資料となるようにと念願している。目下のところ、今年中に当初の二か年の中間報告書を作成し、総合報告書は昭和四十四年度に纏める計画をたてている。

国際ニュース

WFB常任理事会

今秋コロンボで開催

世界仏教徒連盟(WFB)では、次回常任理事会を十月三日にセイロンのコロンボで開催することが決定し、このほどタイ国バンコク市のWFB本部より、全仏事務局に連絡があった。

この常任理事会は一年に一度開かれるもので、前回は東京で開催された。なを日本は常任理事国になっており、今回のコロンボ会議にも代表一名を派遣することになっている。

また第十回世界仏教徒会議はセイロン大会として、明年のウエサカ祭日を期してセイロン国コロンボで開催されることが決定した。これら世界仏教徒連盟関係の諸行事については、全仏国際局で具体的に検討しており、その参加に関しても近日中に発表の予定である。

パンタラナイケ女史

セイロン首相に就任

仏教国として友好関係の深いセイロン国では五月十七日に総選挙が行なわれ、セナヤケ首相の与党が苦戦をきつし、かわつて政パンタラナイケ前首相が入りの党派が圧倒的な勝利をおさめ、この結果、政権が交替することになり、パンタラナイケ女史がセイロン国首相に就任した。

この政権交替により、セイロンの民族主義的傾向は強まり、太陽暦を月暦にあらためられ、官公庁も休日も月暦によることになったと伝えられている。

アジア仏教徒会議

モンゴルで開催

アジア仏教徒会議が六月十一日から一週間にわたりモンゴル共和国ウランバートル市で開催された。

この共産国仏教徒会議に日本仏教界よりはじめて中山理々師

(日本仏教鑽仰会理事長、全仏理事)と坂東性純師(大谷大助教授)が出席した。

この会議にあたり全仏として理事長のメッセージを中山師に托した。

私はこの意義あるアジア仏教徒会議にメッセージを贈る機会を与えられましたことを光栄に存じます。

私たちアジアの仏教徒は人類の魂を超えて人類の福祉と世界平和実現のため力を合せて努力することが最大の責務であると思ひます。

こうした意味において、この度、中央アジアのウランバートルにてアジア仏教徒会議が開かれたことは今後の仏教界に大きな意義をもたらすものと、まことに喜びに堪えません。

最後に、この会議が成功裡に終ることを念ひつつ貴仏教会の発展を心からお祈り申し上げます。

昭和四十五年六月十一日
全日本仏教会理事長福田稔界

太平洋諸島戦没者慰霊祭開催

——梅友会第一回全国大会——

開催各種 昭和46年2月 第2週予定 10日間
訪問地 沖縄・グアム・サイパン・ハワイ

旅行のお世話は近畿日本ツーリストが行います くわしくはパンフレットにて

連絡先 ☎ 460 名古屋市中区大須三丁目39番33号

TEL ナゴヤ <052>241-0901・1920

梅友会事務局 幹事 山田二三雄
具品 神念 東記 装束 贈答 衣贈

法輪閣協力者に

感謝状を贈呈

全日本仏教会では万国博に施設参加した「法輪閣」が予想以上の好評をくし関係者を喜ばせているが、会期も半ばをすぎたので、このほどの法輪閣施設にあたり仏教界部外の協力者に対し大谷光照会長より感謝状と肩額を贈呈した。

協力者は(敬称を略す)
山中大仏堂(須弥塩、五具足の提供)
梅金商店(五具足の提供)

香林堂(香炉、香、ロソク提供)

坂本 哲(大壁画製作)

村上 丙(聖徳太子救世観音像復元)

以上の人々である。

神奈川県仏教会の定期総会

去る六月十三日午前十時から、川崎大師平間寺で理事会に引きつづいて午後一時から総会が開催され盛会であった。

なお当日、国会議員塚本三郎氏の「言論出版の自由と創価学会公明党」についての特別講演があり、聴衆の拍手をあげた。

また会場には仏教慈徳学園の少年たちがみかいた銘石を出陳し、会員に即売された。全仏から桜井組織局長、福井主事が出席した。

全仏各専門委を開催

全仏文化局では、六月十六日に委嘱後

仏教界の動き

(ニュース・投稿を歓迎します)

初の専門委員会を築地本願寺で開いた。会議は委員長に真溪義貫、副委員長に伊藤道機、摩尼清之の各氏を選出し、ひきつづき文化局今年度事業について協議がおこなわれた。

なお、当日は伊藤道機、井上政徳、金岡秀友、島田喜久子、真溪義貫、摩尼清之、三輪美津子の各氏に、稲田全仏理事、事務局より白幡局長、阿部部長、服部主事が出席した。

同組織局でも、六月十七日午後二時より築地本願寺において同局専門委員会を開催し、組織専門委員長に鈴木敏範、副委員長に神野真一、清水谷孝尚の各氏を選出し、つづいて、来る十月七、八日の仏教徒会議新潟大会について協議した。

当日の出席者は、大平文友、北川一有、北之内真竜、熊野竜夫、郡司博道、近藤英雄、椎谷健、新川日見、神野真一、鈴木敏範、田中香浦、西村輝成、枇杷田義正、船口暉子の各氏に稲田全仏理事長、事務局より桜井局長、伊東部長。

全仏国際局の専門委員会は六月二十九日に開催され、正副委員長互選、本年度国際局事業について協議された。

野田市仏が千葉県仏に合併

野田市仏教会(勝田玉雄会長、野田市目吹一七六六観音院内)は、全仏各種団体の部に直接加盟していたが、先日(の)総会において、今後は千葉県内の他地区仏教会と歩調を合わせて活動することが決

議され、昭和四十五年より全仏の直接加盟をやめ、千葉県仏に合流することが決つたので、六月十三日付でその旨を届け出た。全仏としては、野田市仏教会の脱会が千葉県仏への合流ということであるのでこの旨了承することになる。今後は、地区仏教会の一つとして積極的な活動をし、県仏の大きな力になることが期待される。

山形県仏教会結成

六月七日山形市で発会式

東北の雄県、一四九一の寺院数を持つ山形県仏教会が、関係者の努力によりこのほど結成され、去る六月七日山形市薬師堂で盛大に結成式が挙行された。全仏から理事長稲田詮界、組織部長伊東堅純が出席した。

当日選出された役員は左記の通り。
会長・五十嵐顕道 副会長・板垣隆寛、池田国雄、鈴木有連、遠藤正範、常任理事・吉田常俊、嶋津泰道、深瀬俊瑞、石神明、笹原英了、工藤実田、加藤竜弘、兵賀栄秀、北島義融、渋谷隆興、理事・大沢栄順、斎藤啓運、役末勝弘、森島光繁、堤真明 監事・北島義融、張崎祐順 事務局長・板垣隆寛

事務所は村山市大字権岡得性寺におかれた。結成式の記念講演は東大教授笠原一男博士の「現代の仏教徒に望む」があり、聴衆に深い感銘を与えた。
青森県の新発足とともに山形県仏教会の活動は重大な意義をもつもので、東北の各県に仏教会が組織化された。今後の発展が期待される。

お知らせ

宗派仏団体人事(新任)

真言宗智山派宗務所(京都市総本山智積院内) 宗務総長・寺務長 田中隆寛、教化部長 近藤隆敬、法務部長 西田隆演、数学部長 松平実禪、総務部長 別所弘因
善光寺事務局(長野市) 事務局長 筒井芳寛、法務局長 若麻信雄、管轄局長 北川恵作
鳥取県仏教連合会 会長 中村幹弘、事務所(倉吉市東町四七)大岳院内

浄土真宗本願寺派宗務所(京都市西本願寺内) 総長 太田淳昭、総務 阿部慶昭・村上貞之、芝原郷普・峰川昭昭・日谷周暉
仙台仏教会 事務所 仙台市北山一ノ三ノ一 秀林寺内
臨濟宗妙心寺派宗務所(京都市大本山妙心寺内) 総務部長 後藤純一

哀悼

木下 寂元師(全日本仏教会常務理事、天台宗宗務総長、方広寺住職)
胃ガンのため五月中頃より京都第一日赤病院に入院加療中のごとく、六月十二日遷化された。享年六十五歳。

木下師は福井県出身、天台宗会議議員、同議長、同京都宗務所長、同服務・社会部長、同宗務総長、全日本仏教会常務理事等を歴任した。特に広く法制に通じ、生涯を天台宗に捧げた人で、仏教界にも多大の貢献があった。
本葬儀は七月二日、比叡山滋賀院門跡において宗葬をもって執行される。

昭和四十五年七月一日発行
七月号 第一五八号

発行人 伊藤 哲 雄 編集人 白幡 憲 佑

発行所 財団法人 全日本仏教会
東京都中央区築地三ノ一五ノ一(築地本願寺内)